

悪夢の入学式

「入学式なんだから、可愛いスーツを着せてあげましょうね」

妹はまるで母親のようにそう言って、入学式用の女児スーツを取り出した。

フリルのついた丸襟のブラウス、ピンクのジャンパースカートに、上品なグレーのボレロ、大きな白いリボンと、胸元につける花のコサージュ。どう見ても女児用のアンサンブルスーツであった、が――

(なんで、俺が入学式なんか――しかも、あんな女の子用のスーツを……)

(俺……男子高校生、なのに……?)

(しかも、妹の部屋に、俺は裸で、妹は下着姿で――)

しかし頭に霞がかかったように、思考と記憶が曖昧だ。

なぜ妹は下着姿なのか。

なぜ自分は裸で妹の部屋にいるのか。

なぜ妹に裸を見られても自分は普通にしているのか。

なぜ女児用スーツを着て、入学式に行かなくてはならないのか。

ほんやりと疑問に感じつつも、それを疑問として考えるだけの頭が回らない。

「さ、まずは下着からね」

そう言って妹は、スーツをベッドに置き、自分の下着を脱ぎ始める。まずはキャミソールを脱いで、

「はい、着なさい」

「うん」

俺の体は、素直にうなずいて下着を受け取っていた。目の前の妹が上半身裸なのに構いもせず、体温が残るそのキャミソールを着る。

――着られるはずがない。

小学生の妹の身長は、130センチ足らず。対して高校生の俺は、170近くあるのだ。

なのに、キャミソールはごくごく自然に大きくなって、俺の体にフィットする。

上体を包む妹の体温と、鼻腔をくすぐる妹の体臭。肩回り襟ぐり、裾がピンクの帯状になっているキャミソールの下から、男根がガチガチに勃起していた。

――妹の前で、勃起を見られるわけにはいかないのに。

羞恥と背徳感がこみあげてくるが、なぜか体は動いてくれない。まるで操り人形の中に閉じ込められてしまったような気分だった。

「じゃ、これも」

妹はそう言って、ついに自分のショーツをも脱いでソックスだけの裸になり、脱いだばか

りの下着を俺に広げて見せる。

「はい、お兄ちゃん。穿かせてあげるから、あたしの肩に手を置いて、足を入れてちょうだい」

「うん」

あまりにも異常な状況なのに、俺はあっさりうなずくと、妹のすぐ前に立って、肩に手を置いた。股間の屹立が妹の顔に当たりそうになるのも構いなしに、足元に広げられたショーツに足を入れてゆく。

いくら伸縮性があるとはいっても、130サイズの女児ショーツを、170センチの男が穿けるわけがない。無理に穿いたとしてもウエストや太ももにゴムが食い込むか、最悪、切れてしまうだろう。

なのに——これまた穿いていくうちに大きくなつたかのように、人肌の温もりを帯びたショーツはすっぽりと俺の下半身を包み込んでしまう。

妹の下着を、着ている——

女児用ショーツのフロントリボンの下に屹立のテントを張り、しかもそれを妹に見られている耻辱に——しかし俺の体は、何も感じていないかのように動かない。

妹は最後に残っていたレース付きのソックスも脱いで、今度こそ一糸まとわぬ姿になると、

「靴下もはいてね」

「うん」

さっきと同じように、穿かせてもらう。これまたすっぽりと、サイズを合わせたように俺の足に納まって、足首にレースが広がった。

——恥ずかしい。

高校生の俺が、妹の下着を着ているのだ。絶対みつともないことに決まっている。

なのに俺は下着を脱ごとも、逃げようとも、嫌がろうとすらしない。

妹もまた、俺の姿を見てにっこり笑って、

「うんうん、似合ってるわよ、お兄ちゃん」

「えへへ……ありがとう、ママ」

俺の口は勝手に動いて、妹——ママに、お礼を言っていた。

全裸の妹は嬉しそうに笑うと、改めて女児用スーツのハンガーを持ち上げて、

「じゃあこれも、ママが着せてあげる」

そう言って、グレーのボレロとピンクのジャンパースカートをハンガーから外す。最後に残ったブラウスも、ボタンを外して大きく広げ、妹は俺の背後に回り込んだ。

「お兄ちゃん、手を広げて座ってちょうだい」

「うん」

軽く左右に開いた手の先に、ブラウスの袖が入る。

すると俺の腕を、滑らかなサテン生地がするする這い上がっていって、あっという間に羽織る形になっていた。妹にぴったりなくらいのサイズ——つまりは130サイズのブラウスだったにもかかわらず、「ちょっと窮屈かな」くらいの違和感しかない。さらに言えば、40センチも身長差がある俺に、妹はいったいどうやって着せたのか——

考え始めたらきりがない疑問は、しかしどこかのっぺりとした感覚のまま、掘り下げられることはなく、

「ボタン、留めてあげる」

「ありがとう、ママ」

再び正面に回って背伸びした妹の手が、ボタンを留めてくれる。本来であればボタンに留めるどころか羽織ることすら不可能なサイズにもかかわらず、妹の手はいともたやすくボタンを留めていき、俺の体は女児用ブラウスにぴったりと包まれてゆく。

いや、ひとつだけ、ピッタリではない点があった。丈だ。袖丈は肘をちょっと出たくらい、裾丈に至っては、へそにも届かないくらいのところまでしかない。そこだけが、女児用ブラウスを強引に着こんだような不自然さを残してみっともなくなってしまっている。

しかし妹は、襟元にも大きな白いリボンを付けてくれて、

「うん、いいわね」

そんな戯画めいた俺の姿にも、なにもおかしいことなどないかのように微笑んで、

「次はジャンパースカートね。パンツの時みたいに、ママの手に肩を置いてちょうだい」

「うんつ」

目の前に広げられたジャンパースカートに足を入れ、今度はそのまま膝について、着せてもらう。肩までひっかけたところで妹は背後に回り、ホックとファスナーを閉じてくれる。

またも不自然なほどの、サイズぴったり。けれど——やはり裾だけは足りず、ジャンパースカートはチュニック程度の丈にしかならなくて、スカートの三段フリルはおへそのあたりに広がるばかり。大きくテントを張ったショーツは、露出したまだ。

なのに妹はまったく気にも留めず、

「最後はボレロね。羽織らせてあげるから、手を左右に広げて、そのままにしてちょうだい」

「うん」

これまた袖丈以外は問題なく着用し、前でホックを留める。

仕上げにコサージュを付け、頭に黄色い安全帽子、背中に赤いランドセルを背負えば——

「いいじゃない。とっても似合ってるわよ、お兄ちゃん」

「ほんと？ ありがとう、ママ」

「ええ、ほんとよ。鏡を見てごらんなさい」

そう言ってママは、ベッドの横に置いてある姿見に視線を向ける。

そこに映っていたのは——

「わあっ！」

(うつ……！)

口から出た声と、心の声が、乖離する。

身長170センチ、ごつくはないとはいえる男である自分の体が着ているのは、ピンクとグレーの上品な女児用スーツ。たとえ体にぴったりなものだったとしても、みっともないことになるのは免れないのに、まるで横幅だけ広げて仕立てたように丈ばかりが足りてないものだから、余計に戯画めいた光景になってしまっている。頭には黄色い通学帽、肩にはランセルのベルトがかかっているのも、何かの冗談としか思えないありさまだ。

けれど妹も、ぼくも、それを見て満足げにうなずき、

「さ、これで入学式の準備は完璧ね。シューズも出しておいてあるから、先に外に出ていてちょうだい。ママも着替えて、お出かけの支度をするから」

「うん！」

本当に、この格好で入学式に——？

正気とはおもえない。子供たちに騒がれ、保護者に通報され、学校に入れてもらうことなんてできるはずがない。なにより——こんな恥ずかしい格好で、そもそも外に出られるわけがなかった。

そんな理性的な判断にも関わらず、俺の体は勝手に動いて、階段を降り、玄関へと向かう。土間に置いてあるピンクのストラップシューズを履くと、丈の足りない女児スーツの下から勃起パンツを丸出しにした姿で、家の外に出ていた。

外に出ると、風が腰回りのスカートを揺らす。

女の子であれば裾を押さえるところだが、そもそも太もももパンツも最初から丸出しの状態で、隠す以前の問題だ。恥ずかしさに逃げ出したくてたまらなかつたが、俺の体は玄関からステップを踏んで門扉の外に出ていた。

表はガードレールもないような、片道一車線の狭い生活道路だったが、通行量はそれなりにある。行きかう車や人の視線が、容赦なく俺に向けられていた。

恥ずかしさにお尻をむずむずさせながらも、その場で「ママ」を待っていると、

「まあ、アキラくん」

お隣の奥さんが、困惑の表情で話しかけてきた。

「どうしたの、その格好？　まるで女子小学生の入学式みたいだけど」

「はい！　これから、入学式なんです！」

今すぐ逃げ出したい気持ちとは裏腹に、俺の口は、元気よく答えていた。

「そ、そうなの。頑張ってきてね」

「はい！　ありがとうございます！」

本当に女子小学生になってしまったかのよう答える俺に、奥さんは引きつったような笑顔を浮かべて家の中に戻っていった。完全に、自分のことを女子小学生だと思い込んでいるヤバい奴だと思われている。

俺だって、好きでこんな格好をしているわけじゃないのに――

「お待たせ、お兄ちゃん」

内心ひそかに唇を噛んだところへ、妹がやってきた。

上品なピンクグレーのジャケットとタイトスカート。ブランド物のショルダーバッグに、胸元には真珠のネックレス、足元はヒールのついたパンプス。そのいでたちはまるで、娘の入学式に付き添う母親そのままだ。いつもはツインテールの髪も、ヘアピンで上品にまとめている。

男子高校生の兄である自分が、丈の足りない女児用入学スーツを着て。

女子小学生の妹が「ママ」として、保護者のようなレディーススーツを着て。

もはやあべこべとすらいえない格好だったが、妹は何一つおかしなことなどないかのように俺に向かって手を差し出し、

「さ、ママと一緒に、入学式に行きましょうね」

「うん！」

俺は元気よく答えて、「ママ」の手を握り――手をつないで、小学校へと歩き出していた。

*

「令和＊年 ＊＊市立第三小学校 入学式」

校門のプレート横には、そんな看板が立てかけてあった。

その前で、新入生の少女たちと保護者が次々と記念撮影している。その近くには順番待ちの親子連れが、互いに挨拶を交わしていた。

俺たち以外の親子連れは、ごくごく普通の新一年生だ。幼稚園を出たばかりの少女たちが色とりどりの女児スーツを着て、ピカピカのランドセルを重たげに背負っている。

本当に、あの中に加わるのか――

羞恥を通り越した緊張に、陰嚢が締め付けられる。しかし「ママ」は臆することなく俺の手を引いて近づいてゆき、

「こんにちは」

親子連れグループに、話しかけた。

談笑していた3組ほどの親子連れは振り返ると、ギョッとしたような表情を浮かべながらも挨拶を返す。

「え、ええ、こんにちは」

「初めまして、塙原と申します。うちの子もこの春入学なので、どうぞ仲良くしてやってください」

「塙原アキラです！ よろしくお願ひします！」

「ママ」の挨拶に、俺も自己紹介する。

「ええ、よろしく」

母親たちは困惑しながらも、無難な挨拶を返す、が——

「ねえねえ、どうしてお兄ちゃんなのに、小学生なの？」

「何でお兄ちゃんが、女の子のスーツを着てるの？」

「どうしてパンツまるだしなの一？」

少女たちの無邪気な疑問に、空気が凍る。

しかし——俺は笑顔のまま、こう答えていた。

「えっとね、女の子になりたかったから、小学校に入学させてもらったの！ パンツ丸出しこののは、可愛いパンツを見てほしいなって」

「へえー、そーなんだー」

「本当はお兄ちゃんなのに、女の子になりたかったんだあ」

「パンツ、見てほしいんだあ」

「うん！ よろしくね、アキラちゃん！」

クスクスと小馬鹿にしたような笑いを漏らす少女たちに、内心ゾッとしたながらも——俺はにっこり笑って、肯いていた。

「うん、よろしく！」

その時ちょうど、記念撮影の順番待ちが空いた。

「では、先に失礼しますね」

親子連れはそう言って、次々と記念撮影を済ませる。そしてついに、俺たちの番——

「この度はご入学、おめでとうございます。どうぞ、こちらへ」

若い女性教諭は俺を見て、にっこりと笑う。しかしその笑顔は、かすかに嘲笑の色を帶びていた。

「はい、よろしくお願ひします。アキラちゃん、行ってらっしゃい」

妹が母親のように言って頭を下げ、

「はーい！」

俺も元気よく返事をして、まずはひとりで、校門前に移動する。

入学式の看板の横に立ち、ランドセルの肩ベルトを握って、カメラに向かって笑顔を見せ。丈の足りないピチピチのアンサンブルスーツの下から、ペニスのシルエットが浮かんだショーツを丸出しにした姿に、校門前にたむろっていた親子連れが一斉に奇異と、不審と、

好奇の視線を向けているのがわかった。それでも俺は、女子小学生のように笑い続け、カメラに向かってピースする。

(うつ……)

たくさん的人に見られる恥ずかしさに、ショーツの中が疼き、膨らんでくる。たちまちショーツの前に、これまで以上の存在感を示すテントを張って、周囲から悲鳴のような声が上がった。

「あの子、女児スーツの下からパンツ丸出しにして、昂奮してるのがかしら」

「みたいねえ。ふふつ、あんなにおちんちんを大きくしちゃって、みっともないわ」

母親たちのあからさまな嘲笑は、不自然なくらいはっきりと俺の耳に届いてくる。屈辱に震えながらも、俺の顔はニッコリ笑顔をカメラに向けたままだ。

続いて先生は、

「よろしければカメラをお預かりしますので、ご一緒にどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

カメラを先生に預けた妹が、隣に来た。

まるで親子のように手をつなぎ、先生に記念撮影してもらう。ポーズを変えて何枚か撮つたところで、妹が俺の股間を見て言った。

「お兄ちゃん、オチンチン苦しくない？」

「うん、ちょっと苦しい……」

「やっぱりね。窮屈だから、下ろしちゃいましょうか」

えつ、と思う間もなかった。

丈の足りないスカートのフリルの下から丸出しになっている俺のショーツに妹の手がかかり、するりと膝まで下ろしてしまったのだ。とたんに、極限まで勃起して亀頭まで露わになつた屹立が仰角に聳え立ち、すでに先走りに濡れた表面が外気にさらされてヒヤリとする。

「ほら、これなら苦しくないでしょ？」

「うん！　ありがとう、ママ！」

俺は元気よく返事をする——が、内心は今にも狂乱しそうだった。

こんな親子連れがたくさんいる場所、それも女子小学生たちの目の前で、下半身を露出するなんて。女児スーツの下からパンツ丸出しの状態もじゅうぶん変態だったが、こんなことをしたら警察を呼ばれるにきまっている。

しかし先生は騒ぐこともなく、

「ふふつ、立派なオチンチンね。さ、もう何枚か撮影して差し上げますね」

フリルスカートの下から剥き出しのペニスがあらわになっている姿を、何事もないかのように撮影し続ける。

あまりにも変態的な姿を見られ、撮影される恥ずかしさに、しかし俺は逃げだすこともできない。ペニスはますます激しく疼いて、触ってもいないのにビクビクと上下に揺れ始め、そして――

「あ、ああっ……！」

ペニス自体がバイブにでもなったかのように激しく震え、その震えがいっそうの快感を生み、さらに激しい震えを生み出す。そんな循環の中で劣情はついに限界を迎える、俺は妹の手をぎゅっと握ったまま、衆人環視の中で射精してしまっていた。その瞬間もまた、カメラにしっかりと撮影されていた。

「あっ……はあっ、はあっ……！」

「ふふっ、気持ちよかった？」

「うん！ オチンチン、とっても気持ちよかった！」

射精の余韻に崩れそうになる膝を支えながら、俺は満面の笑顔で答える。足元のアスファルトには、飛び散ったばかりの精液がぬらぬらと光沢を放っていた。

その後、すっかり萎えたペニスを露出したまま、さらに数枚を撮影。周囲の親子連れもざわめいてはいたが、騒ぎ立てたり、通報したりする様子はなく――記念撮影は、無事に済んでしまった。

*

校門前での写真撮影の後、俺は在校生に花飾りをつけてもらい、校内へと案内された。

「ご入学、おめでとうございます！」

花をつけてくれたのは、おそらく5年生くらいだと思われる少女。サイズの小さい女児用スーツを無理やり着込んだパンツ丸出しの変態男としか思えない俺の姿に「うわあ……」と言いたげな表情を浮かべていたが、それでも他の新1年生にするように花飾りをつけ、俺の手を引いて校内へと案内してくれた。少女たちの掲げる花輪の下をぎりぎりでくぐって校舎に入り、2階にある1年生の教室に通され、ここで待つように言われて――俺は教室の中央にある席に着いた。

1年生用の小さな椅子は、体重をかけたら壊れてしまうのではないかと思うほどだったが、何よりつらいのは周囲の視線だった。教室にいる40人ほどの新一年生たち。そして背後に居並ぶ保護者たちの、あからさまに場違いなものを見る目が容赦なく突き刺さってくる。今さらながら不思議なことに、クラスメイトは女児しかいなかつたが、いまの「俺」は疑問を感じることもなかった。

こんな状況でも、俺のチンコはガチガチに勃起して、ついにローライズ気味だった女児用ショーツから、竿が大きく露出してしまう。ついさっき、校門前で射精したばかりだってい

うのに。

たちまち隣の少女たちがそれを見つけ、
「お兄ちゃん、おちんちんでてるー！」
「おちんちん、おっきー！」
「ほんとだー！ おちんちん、おっきくなってるー！」

他の子たちも立ち上がって身を乗り出しては、ショーツから飛び出したペニスを覗き込んだ。

どう考えても通報されるこの状況で、俺は——
「えへへ……可愛いスーツ着てたら、おちんちん、おっきくなっちゃった」
誤魔化すように笑うばかりで、逃げるどころか、勃起を隠そうともしない。
そこへ先生が入ってきて、騒ぎを聞きつける。
「はいみんな、初めまして——って、あら、どうしたの、みんな？」
「あのね！ お兄ちゃんのおちんちんが、おっきくなっちゃってるの一！」
「あら、大変ね」

先生は何事もないように流してから、別のことと一緒にしはじめた。
「でも、塚原さんがその席だと、後ろの子が見えなくて困っちゃうわね。塚原さん、悪いけど前に出てきてちょうだい」
「はーい！」

俺は元気よく返事して、もはや玉袋に引っかかっているだけのショーツを直そうともせず、体を大きくくねらせ、竿を左右に振りながら前に歩いて行った。

せめて普通に歩けよ自分、という思いは俺の体には届かず、教室の前方、先生の横に立って話を聞く。とうぜんクラスメイトや保護者とは相対する位置になり、視線がよりいっそ俺の股間に集中して——勃起がますます、滾ってしまうのだった。

「それではみんな、改めて、入学おめでとう。これから入学式だけど、その前に流れについての説明と、新入生の代表を決めたいと思います」

そんな教室での説明ののち——

俺たちは、入学式の会場である体育館の入り口へと案内された。

すでに中には参加者が集まり、あとは新入生の入場を待つばかりの状態だ。
入り口の狭い空間に、40人近い新1年生の半数近くが入っている。当たり前だが、俺は他の新1年生の少女たちより頭二つ分近く抜き出ていて、腰の屹立はちょうど少女たちの首から胸元くらいの位置。先走りにべとべとに汚れたそれを、少女たちは面白そうに見つめていた。

「それではこれより、令和*年度入学式を始めます。まずは新入生入場。在校生の皆様、温かい拍手でお出迎え下さい」

司会進行の教諭の言葉とともに、体育館に割れんばかりの拍手が沸き起こり、担任の先生が俺たちに向かって告げる。

「さ、みんな、ついてらっしゃい」

「はーい」

いよいよだ。

いまだに何かの間違いとしか思えない、小学校の入学式。それも丈の合わない女児用スーツを着て、男根を露出しての参加に、背筋がぞっと冷たくなる。

しかし俺の体は止まることなく、笑顔を浮かべたまま少女たちとともに体育館に入ってゆき——

「っ！？」

今までとは比較にならない数の視線と、声にならないどよめきに、陰嚢が痛いほどに竦みあがった。

体育館にいるのは4年生以上の在校生と、教職員、来賓、保護者。合わせて300人以上にはなるだろう。その全員が入り口に向かい、拍手している。

入場の合図とともに、担任の女性教諭の先導で身長120センチ前後の少女たちが続々と入ってくる中で、身長170センチの男子高校生である俺が、冗談のようにピンクとグレーの女児用アンサンブルスーツを着込み、腰から突き出したペニスを上下左右に揺らしながら入ってきたのだ。可愛らしい子猫の中に、一匹だけクトゥルー神話の名状しがたい怪物が混じっているようなものだ。

会場がざわめき、視線が集中する中で、俺は新1年生たちと同じように中央の通路を進んで、前方の新入生席へと向かう。位置はちょうど、前列、中央通路のすぐ横だった。

「——新入生、着席。新入生への温かい拍手、ありがとうございます」

司会進行の声とともに拍手がやみ、俺たちは用意された椅子に座ろうとする、が——

「続きましては、本年度特別児童のご紹介です。塙原アキラくん、前へどうぞ」

「は、はいっ！」

俺は元気よく返事すると、ショーツを玉袋に引っ掛け、ペニスを左右に揺らした状態で、一步前に踏み出した。

右側の教職員・来賓列にお辞儀して。

左側の保護者列にお辞儀して。

中央通路から、舞台左側の階段に向かい、その前で新入生・在校生一堂にお辞儀して。

何もおかしなことなど起きていないかのような雰囲気なのが、かえって異様であった。なぜ誰も、丈の合わない女児用スーツを着て下半身を露出しながら、神聖な入学式の場に参加

し、あまつさえ壇上に上がるうとしている変態を引きずりおろそうとしないのかわからない。

けれど、俺は何事もなく舞台の中央——マイクの前まで、辿り着いてしまい、

「は、はじめまして。特別児童の、塚原、アキラです」

自分のものとは思えない舌足らずな声が、スピーカーを通して講堂に響いた。

入学スーツを着た、新入生 80 人。

その後ろに居並ぶ、在校生 240 人。

彼女たちの前で、俺は——

「本当は、アキラは、高校 3 年生の男の子です。だけど、小学生の女の子になりたくて、特別に入学させてもらいました。みなさん、どうか、よろしくお願ひします」

そう言って、お辞儀する。恥ずかしさのあまり今すぐこの場から逃げ出したい気持ちは、俺の体にはいっさい伝わらない。

「ア、アキラは、可愛いお洋服が大好きで、今日の入学式にも、女の子用のスーツを着せてもらいました。ちょっとピリスカートが短いけど、可愛いスーツで参加できて、嬉しいです」

じっさいには、ちょっとどころではない。ピンクのジャンパースカートはほとんどチュニック丈で、前も後ろもパンツ丸出し——その下着さえ、下半身の屹立を隠しきれず、怒張した竿が露出している有様なのだ。

大勢の人たちにみつともない女装姿で勃起しているところを見られながら、しかし俺の体はますます昂奮に猛ってゆき、

「好きなものは、可愛いお洋服と、それを着て、たくさん的人に見られること——そ、それと、たくさん的人に見られながら、オナニーすることです。今も見てもらってわかるように、可愛いスーツを着て、見られているだけで、おちんちんがこんなに、大きくなっちゃっています」

挨拶の内容は、さらに危険な領域に突入する。

俺の右手は、やおら股間に生えている竿を握って、

「はあっ、はあっ……！ 可愛いお洋服を着て、たくさん的人に見られながら、おちんちんを弄るの、とっても気持ちいいです……！ 念願がかなって、女子小学生になったので、これからは毎日、可愛いお洋服を着て、学校に通いたいと、思います。自分でいじるのも好きですけど、他の人に弄られるのはもっと好きなので、どうか、在校生、新入生のみなさん、アキラとお友達になって、おちんちんを弄ってやってください……！」

変態的にもほどがある、在校生、同級生達への挨拶を口にしながら、俺の手がついに動き出す。竿を上下にしごきたてて、早くも流れ出した先走りに、グチュグチュと淫らな音が響き渡った。

「はあっ、はあっ、せ、先生も、保護者の皆様も、ア、アキラのことを、いっぱい叱って、

一人前の女の子になれるように、調教してください。どんな恥ずかしい罰でも、アキラは受け入れます。なので、んうつ——！」

声を詰まらせ、手が止まった次の瞬間、俺は400人近い観衆の中で射精していた。ついさっき校門前で射精したばかりとは思えない、大量の白濁液が飛び散って、舞台の上、そして下に向かつても撒き散らされる。

そして射精は、止まらない。2度、3度、4度、5度——10回を超えてすら勢いは衰えることなく、ついには小水のように間断なく流れ出す。絶頂の連続に、俺は気が狂いそうになり——

「はあっ、はあっ——ゅ、夢か……」

ベッドの上ではね起きた俺は、ほっと安堵する。

嫌な夢だった。男の体のままで、女児用スーツを強引に着て、妹に手を引かれて小学校の入学式に参加するなんて。夢は願望充足だなんて聞いたことがあるが、どう考へても違うだろう。まして正夢なんて——まあ、絶対にあるわけないんだが。

「はあ、朝からどっと疲れたぜ……」

あれだけの強烈な射精の夢、もしやと思って確認してみたが夢精もしていないようだ。まあ、昨日もオナニーしてからネタから大丈夫だとは思っていたけど。

「しかしなんだって、あんな夢を——」

つぶやいたところで、部屋のドアがノックされる。すぐに入ってきたのは小学生の妹だ。夢でのことを思い出して、少しばつが悪い。

「おはよう、お兄ちゃん」

「お、おはよう。どうした？ もう朝ごはんの時間か？」

「ううん、お兄ちゃん、忘れてるの？」

「忘れてるって、何を——」

言いかけた俺に、妹が差し出したのは——

「はい、入学スーツ。今日はお兄ちゃんの、小学校入学式でしょ？ これに着替えて、入学式に行きましょうね？ 大丈夫、あたしが保護者として、ついて行ってあげるから」

手渡された女児用スーツ——夢と同じ丸襟ブラウスとグレーのボレロ、ピンクのジャンパースカートのセットは、しかし夢とは違って、俺でも着られそうな170センチサイズで、

「う、嘘だろ、おい……」

つぶやいてつねった頬の痛みは、これが確かに現実だと伝えていた。